

学会印象記

第17回国際エイズ会議に参加して

岡田 誠 治

Seiji OKADA

熊本大学エイズ学研究センター予防開発分野

第17回国際エイズ会議がメキシコシティで2008年8月3日から8日まで6日間に渡って開催された。今回は、“Universal Action Now (Accion universal, YA!)” (今こそすべてに行動を! : 今、全世界が動く!) をテーマに、ラテンアメリカで開催される初めての国際エイズ会議であったが、前回と同様参加者は2万人を超える大規模な会議であった。Centro Banamex というやや郊外にある会場で行われたため、主なホテルからはシャトルバスが運行されていたが、メキシコシティの有名な交通渋滞の中を会場に向かうため、思ったよりも会場への行き来には時間がかかった。また、Global Village という一般開放用の展示企画会場が、Centro Banamex に隣接する競馬場に設置され、時に競走馬が走る風景が見られたのは印象深かった。前回トロントでは会場が市街地にあり、会場内外で頻りにデモが行われたためか日に日にセキュリティチェックが厳しくなって会場に入場するのに時間を要したが、本会議ではそのような混乱はなかった。

開会式は、8月3日に市の中心部チャプルテペック公園内にある Auditorio Nacional (国立劇場) で行われた。主なスピーカーは、WHO 事務局長、UNAIDS (国連合同エイズ計画) 事務局長のほかメキシコ大統領やスペイン副大統領、国連事務局長などであり、前回トロント会議におけるクリントン元米大統領やビル・ゲイツによる派手なスピーチ程ではないにしろ、政治的な要素が非常に高い会議であることが改めて印象づけられた。そんな中で、自らが感染者であるボランティアの女性の切々としたスピーチには心を動かされた。会議は、毎朝総会講演があり、その後5つの部門の口演やシンポジウムが続いた。プログラムは、A. HIVの生物学・病因(基礎研究)、B. 臨床研究・治療・ケア、C. 疫学・予防と予防研究、D. 社会科学・行動科学・経済科学、E. 政策・政治学の5つのカテゴリーに分かれていたが、特にD、Eは私が参加する他の医学系の学会では見られないユニークなセッションであり、また、いかにエイズが世界的に大きな社会問題となっているかを示すものであった。

私は、主に基礎医学の部門に参加したが、会場では人数が少ないながらも活発な討論が行われた。私たちは、高度

免疫不全マウスにヒトの末梢血を移植して HIV-1 が感染可能なモデルマウスを用いて、熊本大学満屋教授らにより新たに開発された新規抗 HIV-1 薬 4'-ethynyl-2-fluoro-2'-deoxyadenosine (EFdA) の in vivo における抗 HIV-1 効果と副作用についての発表を行った(写真1)。HIV-1 はヒトと霊長類にしか感染しないことから、適当なモデル動物開発の取り組みが行われてきたが、近年、ヒト造血幹細胞や単核球を高度免疫不全マウスに移植することにより HIV-1 の感染モデルになりうるということが解ってきた。本学会においてもこれらのマウスモデルを用いた経粘膜感染などについての興味深い発表があった。エイズモデルマウスは、今後、HIV-1 感染の病態解析、抗 HIV-1 薬の効果判定、ワクチン開発などに様々な応用が期待できる。2年前のトロントで開催された国際エイズ会議においてビル・ゲイツがエイズワクチン開発に多くの研究費を投入すると講演していたが、現時点では有効なワクチンは開発されていない。一方、新規抗 HIV-1 薬の開発は盛んに行われており、新薬や新プロトコールの治療成績や副作用・薬剤耐性について数多くの発表があった。エイズの有効な治療法が薬剤のみである現在、作用機所の異なる抗 HIV-1 薬やより副作用が少なく投与しやすい薬の開発は重要であると同時に、これらの薬剤が安価でどこでも使用できる体制の構築も必要である。更には非経口投与可能な薬剤の開発も必要であると考えられる。また、肝炎や結核合併エイズ患者の増加に伴う治療困難例の増加は今後の大きな課題である。

学会場には、NGO や団体によるブースが出され、様々なパンフレットや資料が配布されていて各国のエイズの現状を知ることができた。日本からは JICA とエイズ予防財団がブースを出していたが、来訪者が多く準備した資料類は早々となくなってしまったようだった。学会に伴い、若者向けの教育企画やサテライトシンポジウムなど様々な催しが行われた。そんな中で Global Village という一般開放の展示企画は、国際エイズ学会独特のものでかなりの盛況を博していた。ここでは、各国のボランティア団体等による展示や公開討論会などの様々な催しが行われたが、競馬場の仮設テントという悪条件にも関わらず、いつも大勢の人と熱気であふれていた(写真2)。

会期中同行者の具合が悪くなり、会場内のメディカルサービスを受けた。点滴と投薬で回復したのであるが、その間に若い医師と様々な話をする事ができ、メキシコの医療体制に触れることができた貴重な体験であった（写真3）。メキシコでは、専門科に進むのに人数制限があり人気のある科に進むのは厳しいこと、旧宗主国であるスペインに留学するのがひとつのステイタスになっていることなど、興味深く拝聴した。また、薬は医師の処方箋がなくて

も薬局で購入することができた（注射薬も買えると医師が言っており、足りない薬を一緒に買いに行ったのだが、その薬局には在庫がなく買うことができなかったので、本当に買えるかどうかはわからない）。会場には3か所の救護所があり、私たちの行った救護所には半日で数人の参加者が訪れていた。それほど忙しくなかった事もあり、医療スタッフには非常に親切にいただき、最後はタクシー乗り場まで車椅子で運んでくれた。陽気な彼らのホスピタリティーに感謝したい。

本会議には（財）エイズ予防財団のエイズ国際会議研究者等派遣事業により参加することができた。公募の10名の参加者は、広くエイズに関わる人達であったため、道中日本や世界におけるエイズの現状について様々な知識を得ることができた。また、現地でJICAやボランティア活動等でエイズに関わっている方達と話をすることができた。このような貴重な機会を作っていただき、派遣中も大変お世話になりましたエイズ予防財団木村哲理事長、沢崎康国際協力部国際課長と川島ちはる氏に改めて深く感謝いたします。

会議は、様々なセッションが同時進行で行われたため、聴きたいセッションが重なってしまうこともあったが、会議の重要な部分は翌朝にはGlobal Voiceという速報誌として配布されたため、概要を知ることができた（ページの半分はスペイン語であった!!）。また、スピーチもすぐにホームページに掲載され（<http://www.clinicaloptions.com/HIV.aspx>）、今でもWebcastで視聴することができる。また、診断や治療のトピックについては、Clinical Care Options HIVのURL（<http://www.clinicaloptions.com/HIV.aspx>）でパワーポイントのスライドまでダウンロードすることが



写真 1 ポスターの前で
大学院生の服部真一朗君と

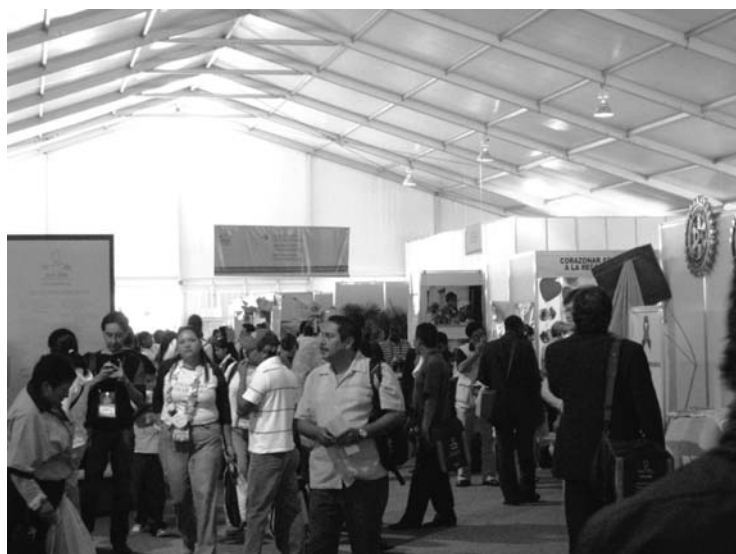


写真 2 混雑する Global Village



写真 3 救護室にて
担当医師と看護師たちと

できるので、活用されたい。コンピューターの発達で大変便利な世の中になり、いながらにしてバーチャル体験と知識は得られるようになったが、学会の場で聴くという臨場感は、大切であろう。第 18 回国際エイズ会議は 2010 年 7 月 18-23 日にウィーンで開催される。日本から多くの方が参加されることを期待している。

国際エイズ会議は、通常私が参加している学会とは趣が異なり、基礎研究者や臨床医の発表よりも、むしろ感染者

やボランティア或いは政治家など、広くエイズに関わる人々の生の声に重点を置いているユニークな国際会議である。開会式においての自らが感染者である女性ボランティアの訴えには心を打たれるものがあったし、エイズ教育やエイズ予防において海外で活躍している日本人の話や発表を聞く機会に恵まれたのは大きな収穫であった。本会議を通して得られた知見と経験を生かして、今後もエイズ研究に邁進していきたいと考えている。